言の波

発行所
カトリック長崎大司教区
本部事務局
〒852-8113
長崎市上野町10-34
カトリックセンター内
TEL 095(846)4246
FAX 095(842)4460

「列福」正式決定を前にして

溝部　脩
高松教区司教

日本殉教者の列福にかかわって、今最後の段階に入る中で何を想うかという題材が私に提出された。交々の想いが交差して、これといったことを述べることはむつかしい。長い準備の期間があったことと、最後にローマとの折衝が短期間に精力的に行われたこととが一番の想いである。その時々の過程で思い出す人々が大勢いることも事実である。本音を言うと、当初は何も分からなかったし、また実現するとも思っていなかったということも事実である。ある意味で夢のような話しに取り組むというのが実情であった。誰が、どのように具体的に進めていくのかもはっきりと知らなかったというのが、私の当初の状況であった。

最初に主導してことを推し進めたのは、司教団を代表する白柳枢機卿であった。具体的にことを進める抜群の能力が彼にはあり、歴史調査委員会と法制委員会を早速立ち上げて、列福に向けての方向性を最初に与えてくれた。これに平山司教が加わり、最初の一歩が踏み出された。法制委員会の方については、よく把握していないが、歴史調査委員会から殉教者についての莫大な文書が回された時、一枚一枚に当時の宮原神父が署名をする作業をしていたのが印象的である。署名が終わってから白柳枢機卿が司教指輪で捺印をしていったのを見たのも初めてであった。その時これらはローマに送られて、自動的に目的が達成されるという安易な考えがあったことも確かである。法制委員会ということで、各殉教者の尊崇に関する聞き取り調査が行われ、私も大分においてペトロ岐部神父はどのように評価されているかを質問された。長崎大司教館の一室で敬愛するチースリック神父から質問を受けたのを覚えている。同様な調査は全ての殉教者について行われた。

それから後は何の進展もないまま、漏れ聞くところでは莫大な史料を読みこなす人がローマにはいないこともあって、史料は積んだきりという噂が届いていた。アウグスティノ会のロホス神父に列福申請人を依頼し、彼により手続きが行われる筈だと聞かされていた。しかし、当時列福の手続きはどのように行われるのか私は理解していなかった。おそらく、多くの委員たちも理解していなかったと思う。その間法制委員のある者が亡くなったりして、手続きは手詰まり状態になっていた。列福には「列福審査書」作成が義務付けられていた。莫大な史料を整理して一冊の本に仕上げるには非常な労力がかかり、これをロホス神父に任せるのは酷であった。当時結城神父がまだ元気であり、ローマとの関係を積極的に推進していた。彼は「列福審査書」として一冊の本にまとめる作業を自ら行った。結城神父の精力的な活動なしにはこの列福は考えられない。その間偉大な功労者チースリック神父が死亡した。列福の暁にはチースリック、結城両神父に最大の賛辞を捧げたい。

それこれしている中に私は司教に選任され、そして3年後列福促進委員会の委員長に任命された。そこで私たちが最初に行ったことは、閉塞状態を抜け出すために現状把握から出発することであった。列聖省を数度訪れたことで、日本殉教者列福の「審査書」は山積みの書類の中に埋もれて、審査の対象にもなっていないことに気づかされた。理由は日本の教会が積極的に動き、列福させたいとの熱い想いがローマに伝わっていないとのことであった。他の国々、または修道会関係は、自分のこととして熱心にローマに働きかけていたことは確かである。問題は私たちの「審査書」の前に先行して提出されている用件をどのように飛び越えていくかということであった。これは一大事であり、それから秘書の平林神父と何度もローマ訪問を行った。2度ばかり宮原司教と最後は司教協議会会長野

村司教を駆りだして列聖省と国務省を訪れ陳情に及んだ。これが効を奏して、早めに日本殉教者の審査が開始されることとなった。

昨年（２００６）春、バチカン庁にある歴史委員会の審査を経て神学者委員会も通過、２００７年２月６日枢機卿会議に提出され、全員一致で可決された。後は列聖省長官が教皇のもとに持参して、その裁可を待つのみとなっている。裁可が下りてから教皇より「教令」として発布され、正式に福者の位に挙げられる。

今思うこと、それはこの列福は日本の教会にとって大きな恵みであるということである。私はこれが実現するために司教になったのではないかという錯覚さえ持つ。確かに私が司教であることは大きな得であり、列福を促進させる大きな原動力となったのも間違いではない。

Q&A：「列福準備作業」

Q．この度の列福手続きのきっかけは、26年前のヨハネ・パウロ二世教皇来日だったとは聞いていますが、その後、どのような具体的な作業が行われたのでしょうか。

A．遠い過去の闇に眠る殉教者を現代によみがえらせる作業は、それこそ気の遠くなるようなものであったことが一面の溝部司教さまの文章を読むと伝わってきます。

人知れず行われた膨大な作業の積み重ねは、実りの季節の到来を信じ、耕し続ける農夫の方々の作業にも似ています。それも現代の先端技術を駆使しての耕しではなく、手づくりの鍬を固い土に打ち込むような作業です。

「畑に宝が隠されている。見つけた人はそのまま隠しておき、喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う。」（マタイ13・14）

これは神の国のたとえ話ですが、26年前の日本という畑をながめた一人の教皇が、その肥沃な土とその地下に宝が隠されていることを直感されたのでしょう。

それほど高く買ってくださった最高指導者の後を継いで、多くの方々が黙々と耕しを進め、ついにその宝が掘り出されてきたというわけです。

Q．そんなに苦労して耕され、掘り出された宝を見ても「持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う」ほどの熱意を持ち得ない人々もいると聞きますが・・・。

A．確かに遠い過去の殉教者の記録を掘り起こしても、すべての人がただちにそれが大変な宝で

あると気づくとは限りません。温度差が現われるのは当然と言えるでしょう。

わざわざ過去を耕さなくても、現在を耕すだけで宝は見つかるという人もいるでしょう。「すべての歴史は現代史」と言われるように、過去の耕しが意味をもってくるのは、現代という時代の耕し、それも現代に生きる自分自身の掘り起こしと結びつかなければ宝を宝として見る感性と情熱は沸いてはこないのではないでしょうか。必ず現代史となる時が来ると思います。

Q. もし福者たちが、自分たちの掘り起こしに尽力された方々にことばをかけるとすれば、どのようなものになるでしょうか。

A. それこそ現実にはあり得ないことですし、仮定の領域に軽々に文字を入れることはつつしむべきでしょう。作業者の一人ひとりが、心の奥で福者たちと深い対話を交わしながら、こつこつと作業をつづけて来られたのですから、そこで福者の思いを聞いておられると思います。

しかし、それでも私たちは、福者たちと時を越えて、同じ信仰を共有しているわけですから、その同じ信仰に基づくことばを差し挟んでも、あながち的はずれとは言えないでしょう。

そして、それは人知れず作業をつづけて来られた方々への、私たち自身の感謝のことばと呼応するものであるはずです。

あたかもイエス・キリストの墓の石を取り除けるようにして、自分たちを今の世によみがえらせてくれたことをまず感謝されるのではないでしょうか。

福者たちの時代と、今とでは困難さの質において違いはありますが、困難な状況があることに変わりはありません。

ともに手をたずさえて、力強く福音宣言を進めることをうながしてくださるでしょう。

いわれなきいじめに遭っても、言うことなすことすべてが誤解を招き、孤独のどん底に突き落とされても、差別・逆差別の果てしなき泥沼にはまっても、果ては不条理極まりないテロにあっても・・・。

それでもなお『だいじょうぶ！神さまが一緒だから。すべてはめぐみ。撤回不可能なものとして人間開放宣言はなされており、人間はすでに救われており、死も罪ももはや克服されているのです。

私たち自身がこれらのことの証人です。』と。

ですから、福者たちのことを『かわいそうに。このままでは浮かばれないでしょう』などと言って、列福式を単なる慰霊行事にしてはなりません。かれらは、迫害と被迫害の二元の世界に、だれよりも深く関わりながら、しかもこれを乗り越えることができたのです。

殉教とは福者たちにとって、かれらの中の神のめぐみの勝利、つまり、自己実現であり、したがってかれらは自分たちの人生をしあわせの頂点へと完成させることができたのです。

かと言って、英霊として祭り上げることなど全く論外です。

列福式は「福音宣言式」です。

福音宣言は、時を越えてなされるべきであり、無数の人々が受洗・非受洗を問わず、その宣言を待っています。

めぐみとは世に流布されているような閉塞的意味合いのものではありません。めぐみは神のいのちであり、力であり、この世界を変えていく圧倒的エネルギーです。

殉教は猛々しいジハード（聖戦）でもなければ、反対に弱々しいあきらめでもありません。人間に宿る神の全能の発露です。

故教皇ヨハネ・パウロ二世が言われたように『過去を振り返ることは、未来に責任を持つことです』。

広い意味、厳密な意味の様々な迫害が渦まく現代、ともに福音宣言式としての列福式の祭壇に登って行きたいものです。

根気の要る掘り起こし作業に取り組んでこられた方々への心からの感謝を込めて。

新しい要理「共に歩む旅」(6)

第四課「このように祈りなさい」

[進行係]（参加者を歓迎して、十字架の印をしながら集いを始める）
「一人か二人の方が祈りで神をこの席に招いてくださいませんか。」

（誰でも自由な祈りを捧げるか、以下の例文で祈ってもよい）
・主よ、この席に来て私たちと共にいてください。
・愛である神よ、ここにおいでくださりあなたの愛でこの集いを豊かにしてください。

A. 私たちの生活

限りのある人間は歴史上常に絶対者を求め、その方に頼ってきました。とくに宗教心の強い私たちの先祖は、イエス・キリストを知るずっと以前から創造主である神に祈りを捧げてきました。

[進行係]
「右下の3枚の写真を見ましょう。」

[進行係]（参加者たちに質問する）
①「人々は何を祈っていると思いますか。写真を見て想像してください。」
②「あなたは心から祈ったことがありますか。そのとき誰にどんな祈りをしましたか。」

B. 神のことば

私たちは祈りを通して神と対話することができます。イエスは常に父なる神に祈りました。イエスは神との親密な一致の中で生活し、弟子たちに祈る方法を直接教えてくださいました。「主の祈り」はイエスが教えてくださった唯一の祈りで、すべての祈りのモデルになるものです。

[進行係]
「どなたかマタイ6・7-15（主の祈り）を読んでくださいませんか。」

・・・聖書を読む・・・

「他の方がもう一度読んでくださいませんか。」

[進行係]「次の聖書の句を一人ずつ祈るような心で読んでください。」
（同じ句を3回繰り返して読む間、他の人は沈黙を守ります）
「天におられる私たちの父よ」（3回）
「御国が来ますように」（3回）
「私たちに必要な糧を今日与えてください」（3回）
「私たちの負い目を赦してください」（3回）
「悪い者から救ってください」（3回）

[進行係]（参加者たちに質問する）
①「主の祈り」を通して私たちは神に何を願いますか。
②私たちが神にゆるしを願う前になすべきことは何ですか。

祈りは私たちの心と体と精神を神に向けることです。私たちに愛をもって近づき、語りかけてくださる神と、そのみ言葉を聞き、神に信仰で応える対話が祈りです。祈りをする時、私たちは神に視線を向け、その方を賛美しながら、その方に恵みとゆるしを願います。

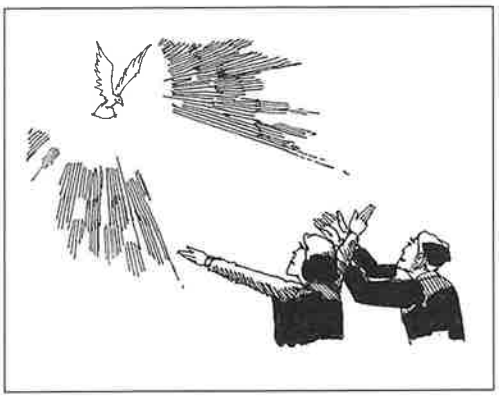
「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。

だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。

あなたがたのだれが、パンを欲しがる自分の子供に、石を与えるだろうか。魚を欲しがるのに、蛇を与えるだろうか。

このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。

まして、あなたがたの天の父は、求める者に良い物をくださるにちがいない。」（マタイ7・7－11）



【参考聖書】
＊マタイ6・5－6：祈るときには
＊マタイ6・25－34：思い悩むな
＊ルカ18・9－14：「ファリサイ派の人と徴税人」のたとえ

C．さらに一歩進んで旅をつづけよう

私たちは祈りを通して神の愛を体験し、その声を聞くことができます。祈りは信仰生活と救いの本質的な部分です。

正しく祈るには、まず自分に必要な事を一方的に願うのではなく、神の言葉に耳を傾けて神の意志が実現されるよう願うことが大切です。

神は私たちが祈る前に、私たちのすべての悩みと願いを知っておられます。だから神が私たちに与えてくださった恩恵と愛について先に感謝の意を表わし、それから願いの祈りを捧げる姿勢が望ましいのです。

［進行係］
「みなさん目をとじて祈ってみましょう。」
（進行係は祈りをする雰囲気の中でゆっくり読む。）

①神が私たちとともにおられることを感じるようつとめてみてください。神があたたかい愛のまなざしであなたを見つめておられることを想像してください。

②子どもが父や母を信頼するように、神に自分を任せ、そのみ手の中にある自分をイメージしてみてください。

③私を神の子どもとして受け入れてくださる神に感謝と賛美を捧げましょう。父や母に親しく話すように神に自分の願いを打ち明けます。

順番に自由な祈りをして集いを終わります。

［進行係りの心得］
＊人間は祈るとき、自然に両手を合わせます。「神の右の手は力を示す」（詩118・15～16）とあるように右の手は神、左の手は人間をイメージし、左側にある心臓の鼓動と神のいのちの合掌など、手を合わせて祈ることが人間のふさわしい態度であることを印象づける。

［覚えましょう］
13．祈りはどのようにしますか。
＊神と対話を交わすことが祈りです。

私たちは神に何かを願うこともできるし（願い）、いただいた恩恵に感謝の意を表わすこともできます（感謝）。正しく祈りをしようとするなら、私に必要なことを一方的に請い願う姿勢だけではなく、神のみ言葉に耳を傾けて神のみ旨を行うことができるようにと願う心が大事にされる必要があります。

14．祈りには　どんなものがありますか。
＊口祷の祈り、黙想の祈り、観想の祈りなど3種類があります。

①口祷：祈祷書や心の中で考えた祈りを声に出して捧げる祈りで、一人あるいは共同体がいっしょに捧げることができる祈りです。（例えば「朝夕の祈り」「教会の祈り」など）

②黙想：神のみ言葉と意志を自分の人生に映して考え、沈黙のうちに心でする祈りです。聖書、聖画像、典礼文、霊的書物などを黙想の資料として使ったりします。

③観想：神との親密な愛を味わいつつ、そのまなざしのもとに全身全霊をゆだねる高度の祈りです。観想の祈りは沈黙の中に、神のみ言葉を傾聴し、信仰の視線をイエスに固定させた中で養われていきます。

「発達障害」を知る（2）

西村良男

第一部　LD（エルディー）（その2）

前回は国語が特に苦手なヨシ子ちゃんの例を紹介しました。今回は別の二人を紹介します。

例2．計算の苦手なトシ君

3年生のトシ君は、国語や社会や理科などの授業はちゃんと受けるのに、算数になると宿題は忘れるし、授業中もふざけてばかりいます。先生によく注意されますし、みんなからはうるさがられています。

トシ君は計算をしたり式を立てたりすることが苦手です。6本のエンピツを3人で分ける時、1人2本ずつに分けることはできますが、それがどういう式になるかが分かりません。筆算でも、2ケタ以上になると、どの数とどの数を足したり引いたりするのか分らなくなります。

［トシ君への対応］

トシ君が算数の時間にふざけるのは、自分ができないことをみんなに知られたくないためで、算数の宿題は分らないから忘れたふりをするのです。

分からない時には恥ずかしがらずに質問することをみんなにも徹底し、トシ君がふざけるのは、分らずに困っている時だということを子どもたちにも理解してもらいます。

物の数を数字にしたり式に表わしたりすることは、エンピツやお金などの具体物を使って教えると分りやすくなります。繰り返し練習を積み重ねることで、少しずつ理解が定着するようになります。

筆算は数字のケタを揃えやすくするために、マスのあるノートを使わせるとうまくいくようです。計算の練習問題以外では計算器を使ってもよいことにすれば、興味を持って取り組みます。

正しくできた時には、その都度必ずほめてやることです。「できた！」という達成感を味わった子どもは、例外なく意欲的に学習します。これはトシ君やヨシ子ちゃんに限らず、どの子どもにも言えることです。

例3．忘れものの多いサッちゃん

サッちゃんはよく忘れ物をします。今日は三角定規を忘れました。何回注意されても直りません。生き物観察に校庭へ出る時も、先生は「虫メガネだけ」と言ったのに、サッちゃんは教科書や筆箱も持って出てきました。大勢の中でいくら大きな声で指示しても、サッちゃんは先生の声を聞き取れません。頭の中にはいつも、あれこれといろんな事が浮かんできて、今聞いたばかりの大切なことも忘れてしまうことがあります。

［サッちゃんへの対応］

大勢の人がいて少々うるさい所でも、私たちの耳は必要な音だけを聞き取ることができます。しかし、LDのサッちゃんには、いろいろな音の中から一つだけを選んで聞き取ることができません。だから、多くの人の中で話す時には、みんなを静かにさせ、「サッちゃん」と呼びかけて、サッちゃんの気持ちをこちらに向かせ、聞いていることを確認してから話します。

サッちゃん一人のときにも、できれば肩に手を置いたり、サッちゃんの手を握ったりして話すと効果的です。聞き逃した

り聞き間違えたりしないように、短い言葉ではっきりと話します。複雑なことは絵や文字に書いて見せながら話すと、より判りやすく印象に残ります。

忘れものの多いサッちゃんには、メモ用のノートを用意してあげます。大好きなキャラクターのついたノートを買ってあげると、毎日忘れず喜んで書き込みをします。明日の準備の時に必ずメモ帳を開いて確かめる習慣を、時間をかけて身につけさせます。これはサッちゃんが自立するために欠かせないことです。メモをとるという習慣はサッちゃんに限らず、どの子にも身につけさせたい大切な習慣の一つです。

◆ 気をつけたいこと

①学校と家庭とでは違う

LDを持つ子どもでも、家庭では何の問題もなく生活していることが多く、わが子のLDは親には見えにくいものです。家庭には学校のような集団行動の場面がなく、本人のペースで行動しても問題となるようなことはあまりないし、親子のコミュニケーションも十分にとれますが、学校では集団行動が中心で、教師と子どもとのコミュニケーションも、うまくいくとは限らないからです。

②失敗は数えず成功をほめる

失敗ばかり指摘されると自信をなくしたり苛立ったりします。その結果、感情の不安定や劣等感から不登校や引きこもり、時には暴力などに発展することがあります。LDの子には失敗はつきものです。失敗は数えず、うまくできたことだけをほめて励ますことが大切です。

③生活は改善される

LDは、学習の発達性の障害です。学習は遅れながらも徐々に獲得していくとされています。不得意な部分についてはゆっくり時間をかけて学習することです。逆に、得意な分野を伸ばしていくことを忘れてなりません。次のような報告もあります。

「絵は大好きだが読み書きに障害があるため勉強が苦手なAさんは、内容を絵に描いて教えてくれる家庭教師と出会ってからは勉強が面白くなり、学友たちの協力もあって、なんとか高校を卒業しました。その後、仲間や先生に助けられながらデザイン専門学校を卒業した後、広告会社に入社しました。そこでは得意な才能を生かしてイラストの仕事をし、今では会社になくてはならない存在になっています。周囲の人もAさんの苦手な部分を理解し、協力してくれます」（「発達障害を考える本3」より抜粋要約）

LDの障害を持つ子どもでも、周囲の協力とその子に合った学習を進めることで、個性や才能を生かした豊かな生活を築くことができます。発明王のエジソンや原子物理学者のアインシュタイン、そして、イギリスのチャーチル元首相などもLDだったのではないかと言われています。

今、全国どこの学校でも、このような子どもの個性を大切にし、持って生れた才能を引き出して育てる努力をしているところです。私たち周囲の大人も、細かな事情は分らなくても、子どもたち全てに優しいまなざしを向け、温かい支援の手を差し伸べる努力をしていきたいものです。

《参考図書等》

・シリーズ「発達と障害を考える本」①～④（ミネルバ書房）
・「実力を出しきれないこどもたち」（NPO法人・えじそんくらぶ）
・LD児の教育的援助に関する研究（山口県教育研究所）
・特殊教育研修報告書（宮城県教育センター）

《サイト》

・日本LD学会JAPANESE　東京都教育委員会ホームページ

《相談機関》

・教育委員会の教育センター
・心の教育総合支援センター（長崎大学）

問題行動の場面ばかりが出てきますが、発達障害の子がいつも問題行動をおこしているわけではありません。また、発達障害があるかどうかは軽々しく判断せず、相談機関や医療機関などに相談することが大切です。

このシリーズでは、発達障害の特徴的なさわりの部分だけを紹介します。もっと詳しく知りたい方は、書店で関係図書を求められるか、インターネットで検索してみてください。

聖書豆知識

「油を注ぐ」とは・・・

Q. 私たちの救い主である方は、「イエス」という名前だけで呼ばれてもいますが、ただそれだけではなく、その名前に「キリスト」を付けて「イエス・キリスト」と言われています。また新約聖書の中でも、そのように記述されているところがたくさんあるように思えます。つい先日、聖書を勉強していて、「キリスト」がヘブライ語の「メシア」のギリシア語訳であり、「油注がれた者」という意味も知りました。そのメシアについて少し説明して下さい。また旧約聖書を読んでみると、様々な人が油を注がれて王や祭司に就いていることが分かります。そこで、「人に油を注ぐ」ということに疑問を感じました。「油を注ぐ」には、一体どのような重要性があるのでしょうか。またその起源は、どこに見出されるのでしょうか。（前号の続き）

A. 前回は、「イエス・キリスト」と「メシア・キリスト」について説明しました。大まかではありましたが、多少それらの意味と背景を知って頂いたことと思います。今回は、「油を注ぐ」ことの重要性と、その起源について簡単に考察を進めて参ります。

「油を注ぐ」の原義は、（手などで）「擦る、磨く」でした。例えば、エレミア書22・14で「色を塗る」、イザヤ書21・5で「盾に油を塗る」のように、腐食から守るために何ものかを塗って擦り込むことを意味していました。かつてのセム族の古い遊牧民にとって油とは動物の脂肪でした。しかし、イスラエルでは植物油を使い、例えば王となる者の頭から注いでいたわけですから（サムエル上10・1）、「擦る、磨く」とは趣が全く異なると言えるでしょう。

当時の日常生活の中で、植物油には様々な使用法があったと言われています。例えば、食後に手を洗うとか、彫像を掃除して洗うというように、清潔感を保つために油で手を洗い、香水のように香りを付ける役割を果たしていました。また、病気や怪我から有効な回復をもたらすために、油を使っていたということも大変重要だったようです。そのため医者は、身体の回復と強化のために油を使っていたのです。ルカ10・34で、傷ついたサマリア人に、油とぶどう酒を傷に注いでいますが、恐らくこうした目的のためだと思われます。さらに、油は喜びの象徴でもありました。（箴言27・9「香油も香りも心を楽しませる。」）を見れば、それは明らかです。だからこれらのことをまとめると、「油を塗る」ということには、「清める（洗う）」と「強める」という意味合いが強く出てきます。特に前者はユダヤ教の大祭司を清める時に、後者はエジプトで官吏がその良き働きのために油を注がれていたことに象徴的に示されていると思われます。

次に、いくつかの具体例を挙げてみましょう。

中東でも油を塗るということは重要でした。エジプトでも、王となるべき人物に油を注いでいたようです。しかしそれはその人物を聖別するためと言うよりは、むしろ清めるためだったと言われています。だから油を注ぐということには、「王の選び」という要素は見られません。しかし、その王に王としての権威と王であることの証しを与えていたわけです。それに反して、ヒッタイト（現在のトルコあたり）では、まさに王を聖別する儀式に油を使っていました。

最後にイスラエルでは、油を注ぐということに、わりと明確な「清め」と「強め」という区別があったようです。特に祭司に油を注いで聖別する時は、彼を強めるという意味合いはなく、むしろ彼を清めることによって、祭司にふさわしい者とすることがその目的だったのでしょう。それに対して、王となる者に油を注ぐということは、彼を清めるというより、強めることによって、神に代って民を治めさせる目的がありました。

これをもとにイエスについて考えてみると、彼が「油注がれた者」と言われる時、その両方の要素を備えています。ヨハネ福音（19章）から、彼は真の王であるし、ヘブライ書（新約の他書には見られない）から、彼こそが真の大祭司であることがよく分かります。そういう意味で、彼こそが、真に「油を注がれた者」だと言えるでしょう。

（湯浅　俊治）

教会学校に携わって

長いこと勤めていた職場からやっと解放され、これから“毎日Sunday”を満喫しようと、あれこれ夢を膨らませ動き始めた矢先、私には神さまから大病の試練が与えられることになり、その夢は消えてしまいました。けれども、苦しみの後には、これに勝る喜びを味わわせて下さるという神さまの計らいは本当でした。そこに用意されていたものが、今、携わらせていただいている教会学校の仕事でした。私が教会学校と関わるようになってから、かれこれ10年を過ぎたでしょうか。この間、確かに聖霊に促されて過ごしてきたことを実感致します。

◆自分自身について・・・

幼児洗礼である私は、私なりに信仰に関して神さまを「天の父」としてしっかり理解していたつもりでしたが、一旦伝える側に立った時、今までの自分の信仰は殆ど盲目的であったことに気づきました。それからは、伝えるために必要なことを必死で準備していきました。そのうちに、神父様のお話を注意して聴くようになり、いろいろな本に触れ、印刷物にも目を通すようになり、少しずつ目が開き、まず自分自身が大きく変化し、神さまをこれ迄より以上に親しく、身近に感じるようになっていきました。

◆子どもたちを見て・・・

これから多くの、みことばの種が蒔かれる子どもたちの心に、百倍の実を結べるように日頃から、土おこしが大切だと思っていますが、先日、４年生と主題「天に宝を積む」を学んだ時です。子どもたちに次のような問いかけをしました。「あなたは宝物を持っていますか」「あなたにとって宝とは何ですか」。私の頭の中に描いた子どもたちの答は、まさか「お金」はないとしても「日記」「友達からの手紙」「プレゼント」「大好きなもの」「高価なもの」等だろうと予想し授業の展開を考えていました。ところが、子どもたちから即、答が返ってきました。「いのち!」「家族！」「神さま！」「友達！」一瞬、自分の考えの浅はかさが恥ずかしくなりました。と同時に、子どもたちは少しずつでも着実に神の国を学びつつあるのかと嬉しく思えました。

◆保護者では・・・

保護者の中には、一般教育は学校で、信仰教育は教会学校でと思われている方がおられるかもしれませんが、神さまは両親に子どもを託されました。両親はそれを承諾したわけですから、信仰を伝える第一人者は親であります。カテキスタはあくまでもその協力者です。私たちの教会では、これらのことに納得し、保護者の会を立ち上げました。「言の波」４月号に載せられていました晴佐久神父様の「福音宣言」を読んでドキッとしましたが、信仰教育が理屈、説明のみに終わらないようにと一石を投じられたのだと思っています。子どもたちに知識を与え、実践へ導こうと、うちの教会では、保護者の会、司牧宣教部、教育部の三者が一つになって努力しているところです。

子どもの信仰教育に、神父様や修道者の方々と共に一般信徒も携わることは、これから特に必要になってくると思います。

出エジプト記で、神さまが、イスラエルの民をエジプトから救い出すようモーセに命じられた時、自信のないモーセに対して神さまは「わたしは必ずあなたと共にいる。このことこそわたしがあなたを遣わすしるしである･･･」と言われました。神さまは「私」のことはすべて知っておられます。「私」にできない事は望まれないはずです。

私は、これからも、微力ではありますが「神さまは共にいてくださる。必ずよいように図らってくださる」を信じ、神さまの計り知れない慈しみの中で、導きを願いながら使命を果たしていきます。

（毎熊　智子）

江袋教会
復元にむけて動き出す

撮影　三沢博昭

2月12日、漏電のために江袋教会（新上五島町仲知小教区巡回教会）が焼失した。2月15日には高見大司教らが訪問し、現場を視察すると共に、同教会の信徒たちを見舞った。

火災で焼失してから2ヵ月後、文化財と同格のものとしての評価も受けていただけに、報道された映像は衝撃を与えたが、地元の信徒や専門家の方々との話し合いの結果、創建時の状態に復元する方向を選択した。

3月15日には、長崎大司教区は各報道機関に「江袋教会復元基金」の口座を開設したことを知らせ、協力を呼び掛けている。

また、新上五島町教育委員会は、4月13日、町指定文化財となる見通しを明らかにしている。

そこで、今回はこの江袋教会について、取り上げてみることにした。

明治15（1882）年、迫害を生き抜いた信徒によって自分たちの村から信仰復活後、五島最初の神父となる島田喜蔵神父の叙階を前にして、神父の出身地に最初の天主堂を建立した。

曽根、津和崎の信徒を司牧の対象としていた。

昭和23（1948）年、仲知教会の建立に伴い、仲知教会の巡回教会となった。

2007年4月現在で、36世帯、信徒数82人である。

焼失後の教会内部

【特　色】

五島の他の地区の信徒と同じ様に、迫害の嵐が吹さすさぶ頃、外海地方から小舟で逃れてきた者の子孫で篤い信仰を持ち、大半が漁業によって生計を維持している。現存する使用中の木造教会としては最古のもので、こうもり天井と呼ばれるアーチ型の天井や、構造的にも貴重なものとして文化財的建物とされていた。また、色彩豊かなステンドグラスなどがあった。

◆郵便口座
01720・8・97471
宗教法人カトリック長崎大司教区
「江袋教会復元基金」

◆銀行振込・
十八銀行・浦上支店・普通預金
160310、
宗教法人カトリック長崎大司教区
「江袋教会復元基金」代表　髙見　三明

焼失前の教会内部

皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

第三回 アジア巡礼所責任者会議に当たって

「巡礼と巡礼所、希望の場」というテーマで10月15～17日にアジア巡礼所責任者会議が長崎で、行われます。この会議は2003年の第一回マニラで、2005年11月に韓国のソウル（アジアの14カ国90人が参加）に続いて、第三回のアジア全体の巡礼所責任者会議にあたります。ヴァチカン「移住・移動者司牧評議会」主催の会議であり、それぞれの地域で10年以上前から定期的に巡礼所を中心にした司牧を深める国際会議です。私は上の二つの会議に参加しましたので、簡単に紹介したいと思います。

会議の内容はワークショップ形式で、決められたテーマを中心にして、それぞれの巡礼所が抱えている課題、特徴、役に立つアイディアなどを分かち合いながら、よりよい司牧を目指していきます。現代の巡礼者は外国に行く傾向が増え、それぞれの国を超える司牧の配慮を必要とします。例えば言語の問題が出てきます。国際的な人気のある巡礼所には様々な言語で典礼ができるような準備が欠かせませんし、訪れる人々に通じる説明などが求められます。当然ながら、主な言語でゆるしの秘跡と案内ができる人が望まれ、場合によって訪れる人々の文化を知る必要があります。巡礼した人が体験しますが、巡礼所が宗教的な特別な場所だと言えます。それぞれの小教区の中心はその地方の人々ですが、巡礼所は外から、多くの場合一回のみ訪れてくる人々の世話する場です。巡礼者はカトリック信者とは限りませんし、観光のつもりで来る人々の世話をもしなければなりません。一回限りの出会いを助けるようにどうすればいいかというのは常の課題になります。私はこのような会議に参加して初めて知りましたが、スリランカでは、マリア様に献げられている巡礼教会は諸宗教と諸民族の出会いと許し合いの場になっています。場合によって巡礼所は難民を受けいれ、世話するところでもあります。また、巡礼所と宿泊施設が並んで巡礼者は一泊や一週間の黙想ができるところもあります。さらに、巡礼所は現代人の悩み、不安、ストレスなどを受けいれる場になる役割が増えてきたようです。フィリピンでの会議は「巡礼所、歓迎と出会いの場」でした。ここで主に巡礼所は訪れる人々を誰でも快く歓迎される雰囲気を助ける心構えが強調されました。その歓迎があってから出会いが生まれます。その出会いは様々なレベルがあり、一緒に巡礼する人々、巡礼所を世話する地元の人々、神様、自分などとの出会いを助ける場を作っていく決心をしました。この時の最後の話でフィリピンの司教は、**「観光者の気持ちで訪れた人を巡礼者の心で返そう」**との言葉が印象に残りました。

韓国での会議が**「巡礼所、神の愛を体験する場」**のテーマでしたが、やはりどうすれば巡礼者が神の愛の体験を助けるかという課題がありました。貧富の激しい地域に難民、差別、いじめに遭う人々が巡礼所に保護を求める時代になりました。場合によって巡礼者は自分の教会にできない神体験を求めて巡礼所に来ますので、特に受けいれられる配慮をする決心をしました。

今度の長崎会議は**「巡礼と巡礼所、希望の場」**というテーマで開かれます。どのような話し合いになるかまだ分かりませんが、恐らく長崎にしかないものを出せば出すほどこの会議につながると思います。考えてみればアジアでは割合に経済的に悩む人の少ない日本に希望を失う人々が多い国でもあります。その日本でこの会議が行われることが摂理的とも言えます。長崎の教会群が全国に話題になってきた今こそ、その精神と癒し、つまり神様にしかあり得ない人間の希望に目覚めさせる機会になるように祈りたい。

生活の中の教会

紐差教会　　フォトプラン 山本 富夫

幕末から

平戸島の中央部、木ヶ津湾奥の小高い丘に建つ教会堂。

信仰の曙は外海、黒島からの「田崎」移住に始まるという。

幕末にはペルー、ラゲ師、明治期にはマタラ師が長年に亘り働き、多くの信徒が誕生した。

その後、後に馬渡島に移築される旧教会堂を建立。やがて信徒数も大幅に増え、一九二九年、二年余の歳月をかけ、現教会堂を完成。

上神崎、宝亀、生月、田平に教会堂を建立した慈父マタラ師は今、田崎墓地に眠り、人々の信仰を支えている。